

大乘本生心地観経にいう母の徳の保育上の意義

藤 岡 隆 男

《序》

かつてF.W. Nietzscheが、仏教は衛生学の一体系だといったが、特に精神衛生との関連が強いように思われる。⁽¹⁾

大乘本生心地観経⁽²⁾に父母の恩を説いて、父に慈恩あり、母に悲恩ありと説き、その母の悲恩について、大地、能生、能正、養育、智者、莊嚴、安隱、教授、教誡、与業の10種があるという。

私はここに説くところの父母の恩、殊に母の在り方を通じて、現代に於ける子どもの育て方について考察してみた。

《大 地 の 徳》

経⁽²⁾に、母胎中に於て所依となるが故に、とある。胎児が母胎内にある時、栄養、排泄等を母体に依存していることは勿論であるが、母の生理的ストレスが胎児に影響を与えていることは、すでにいろいろと証明されているところである。また情動的ストレスが、妊娠経過や胎児に影響を及ぼすという科学的立証も報告されている。

L.W. Sontagは、個人の生理、心理的特徴の多くは遺伝子によって決定されると同じ程度に、胎内生活におけるいろいろな環境の影響を受けるものであるといい、胎児はすでに原始的な情動感受性をもっていると考え、胎児をとりまく環境因子の一つに、母親の情動を考えている。N. Fries, T. Benedekも、ほぼ同様のことを報告している。⁽³⁾ またM. Boss⁽⁴⁾によると、注意深い婦人たちは、妊娠時、胎動は妊婦の情緒的興奮の影響をいちじるしく受け、ほんのわずかでも驚いたりすると、胎児が異常に長い間ひっそりと動かなくなることを感ずるといって報告して、以上の考えを立証している。

かつて前漢の劉向(77～6BC)は『烈女伝』の中に、周公の母の妊娠時の生活態度を範として胎教を説き、妊婦は目に邪色を見ず、耳に淫声を聞かず、自ら行を謹しみ、心を正しくすれば、胎中の児も自然その影響を受け、立派な人となるとして、妊婦のあり方を指導した。^{(3),(5)} わが国では元禄3年(1,300年)稲生正治が『蠡斯草』でこれを論じて以来、ひろく民衆の中に伝わっていた⁽³⁾が、最近はおかえてこのような考え方は次第にうすれてきているようで、残念なことである。

而して大方等大集経⁽⁶⁾には、妊婦が仏・法・僧の三宝に帰依すると、心身ともに健全で、人に尊敬される子が生まれるとあり、これは恐らく、金光明経⁽⁷⁾にいうように、三宝に帰依することによっ

大乘本生心地観経にいう母の徳の保育上の意義

て、その人の身・口・意業が清浄となるからであろう。過去現在因果経⁽⁸⁾にも、妊娠中の母親の情緒的在り方が、生れてくる子どもに影響することが説かれている。

然れば母親の存在が大地にたとえられてあるのは、子どもは生れる以前の大事な時期から、その胎内に於てすでに依存し、意識すると否とにかかわらず、その影響を大きく受けているのであるから、当然のことであろう。

而して K. Jaspers は、「自分を自分自身の上だけに築く人間存在は地盤を喪失する。人間が人間になるのは、何時も自己を他者にゆだねることによってである」⁽⁹⁾といているが、これは真宗でいう他力本願にも通ずる考え方のように思われる。

すなわち、人間の存在は何時も何かに支えられ、そしてそのものに依存して成り立っているものである。たとえば 30cm 四方の板があれば、我々はその上に立ち、30cm ほどの幅の板があれば、その上を歩けるように思う。もしそうならば 30cm 四方の板をテレビ塔の上に置き、30cm 幅の板をビルの屋上から屋上に橋渡しをして、その上に立て、その上を歩けと言われたら、はたして何人の人がそれを出来るであろうか。我々が気づく気づかぬは別として、立ち、そして歩けるのは、我々を支えてくれているこの大地があったのであり、それを依りどころとしていたのである。そしてその依りどころとなるものが、より大きければ大きいほど、その上に立つ人間の存在はより確かなものとなるのであります。

仏智の所照すなわち光明によって無限に広がる光明無量の大地に支えられて、真の安定感があり、その大地は永遠に続く、すなわち寿命無量に裏づけられて、真の安らぎがあるのである。これがすなわち浄土という理想の大地であろう。そしてこの光明無量・寿命無量の本体、これが人格化されたものが阿弥陀仏であり、その本願は理想であり、目標であり、依りどころなのである。

かくして我が国で盛んになった浄土教は、その母性原理を大地として、庶民にひろく受け容れられていったものと思われる。

《能 生 の 徳》

経⁽²⁾には、衆苦を経歴して而も能く生むがゆえに、能生と名づくという。観経疏⁽¹⁰⁾にも「始め受胎してより 10カ月を終るまで、行・住・坐・臥にもろもろの苦悩を受くることは、とても口で言い得るものではなく、欲楽、飲食、新しい衣服よりもただ子のことを憂いて、心は常に休まることが無い。また出産が近づくと次第に苦痛はげしく、昼となく夜となく愁い悩む。若しお産が重い時は、百千の刃で屠り割くが如く、或は時にそれで死ぬこともある。而してお産がすんで苦悩が去ると、喜びは尽きることなく、それは恰度貧女が如意珠を得たようであらうもなく、その子が産ぶ声を発するや、妙なる音楽を聞くように楽しくなるものである」という。

妊娠は生理的なものではあるが、時として肉体的に異常を伴うことがあり、出産には苦痛はつきものである。それらの危険や苦痛に耐えて、能く生んでくれる。いやそれが本来当然のこととして、わが国の母は受けいれてきたのである。

そればかりではない。妊婦には強度の内向性と外向性とが、まぜ合わせになって同時に存在する

藤岡隆男

という独特な現象がみられ、積極的で楽天的な面と消極的で悲観的な面とがあり、妊婦の感情生活は、これらを両極として絶えず移動し、不安定で変化しやすいものであるという。このような肉体的、精神的、不安、苦痛に耐えて、能く生んでくれるのである。⁽³⁾ いや、このような甘受があるから Newton も言っているように、母親は自分の子どもを初めて見た瞬間から非常によろこぶのであろう。⁽¹¹⁾

《能 正 の 徳》

経⁽²⁾には、母手を以て五根を理むるが故に、とある。五根とは眼、耳、鼻、舌、身で、外界の対象をとらえ、また心内に五識（眼識、耳識、鼻識、舌識、身識）の認識作用をひきおこすことにおいて勝れたはたらきがあるから根といい、それが五あるから五根という。理はおさむ、玉をおさめ磨くことであり、転じて広く治め正す義である。

各年令の発達段階に応じて、個々の子どもの個性に応じた適切な保育方法が行われるならば、正常な発達が確保され、時に不適応の状態に陥ることがあるとしても、全体としてしだいにいろいろの状況に適応していくものである。

最近の研究によれば、子どもはすでに新生児期において、母親のやさしい語りかけに反応するという。精神発達をとげさせる手段は、乳幼児期には知的刺激ではない。家庭の母親による子どもの世話、愛情ある接触や交歓をとおしてなされるのである。特にこの時期の子どもは、五根の感覚刺激などの学習体験を母の手で、すなわち直接与えられ、経験することによって、いろいろの精神機能が発達していくものである。⁽¹¹⁾

《養 育 の 徳》

経⁽²⁾には、四時のよろしきに随いて能く長養するがゆえに、とあり、また、母の懐を寝処とし、左右の膝の上はいつも遊び場となり、乳房から甘露の母乳を出して与え、まことに長養の恩は天にあまねく、憐愍の徳は広大にして比べものが無い、とあり、観経疏⁽¹⁰⁾にも、出産後3年間は常に子どもの糞便の中に眠り、ふとんも衣服もきれいであることがないとある。

ロシヤのことわざに「母親がただでしていることは、お金を出して頼んでもやってもらえない」⁽¹¹⁾というのがあるが、これは母親のその子に対する強い愛着 attachment によってなされるものであり、この関係は独特の性格を持っている。まず生まれる前まで子どもは母親の体内で生まれ、そして生まれたのち、その子どもが母親に全面的に依存するがぎり、母親はその子の生存を守り通すのである。この独特の強い attachment が、乳児の生存と成長発達にとって、決定的な意味をもつものであるという。この愛着の力は非常に強く、夜となく昼となく汚れたおむつを替えたり、泣き声に心を配ったり、危険から保護したり、眠くてやりきれないような夜中でも授乳して、自分の子どもの養育に必要な犠牲ならば、あえていとわれないという。⁽¹¹⁾ また A.H. Maslow によれば、「人間の欲求は一般に下等な欲求から高等な欲求に配列できる。生理的動機が充足されなければ他の動機は派生

しないし、充足などは問題にならない。しかし母性愛は違う。燃えさかる炎の中の我が子を助けに行こうとする。ここに人間の自己実現の欲求の優位性があり、この欲求が理想的な母親をうみ出していると考えられる⁽¹²⁾といている。

Mc Bryde は Duke University で、母子同室制を開始したところ、母乳哺育の増加と、電話による不安の相談の減少をみたという。また Greenberg らのスウェーデンでの実験では、無作為的に指定して母子同室制をとらせた母親は、同室制をとらなかった母親より自信を持ち、育児に関しては自分が適していると感じ、さらに自分の子どもの泣き声に対し、より鋭い感受性を示したという。Lind の推論によれば、生後数分間および数時間のうちに、親子の愛着にとって最適な時期である感受期 (sensitive period) が存在するという⁽¹¹⁾。

このようにして母と子の愛着ができた子どもは、母親の膝を依りどころとして、活発な探索行動をするようになるという。

ところが乳児院や養護施設のようなところで、親から分離しての生活が、子どもの心身の発達に好ましくない影響のあることが指摘されているが、H. Bakwin によれば、施設で生活している乳児は、家庭児に比較して微笑も少なく、喃語も乏しく、落ち着きがなく、それでいて周囲に無関心で幸福そうな表情がなく、家庭児と同じ熱量を摂取しているにもかかわらず、体重の増加も悪いという⁽¹³⁾。併しこれらの子どもも、家庭に帰ると、いずれも急速に回復したという。

また R. Spitz⁽¹⁴⁾ は、施設乳児の発達の遅滞が 9～12カ月で顕著であるが、これは母親不在による母性的養護の喪失 maternal deprivation によると考えられるが、未婚の母親によって保育されている施設児の場合、発達指数の低下は認められていないという。これについて J. Bowlby⁽¹⁵⁾ は、母性的愛情あふれた養護があるか、ないかが問題なのであるといている。

最近では一般の家庭でも、現代社会の生活不安からくる精神生活上の母子分離が起りうる。すなわち母性喪失である。母子関係の成立は、はじめから本能として固定して存在するものではなく母と子の日常の具体的な接触行動の中で作りあげられていく。乳児期に母親の働きかけ — 感覚的、知覚的、言語的刺激 — 母と子の感情的交流がなければ、子どもの精神発達や情緒に障害をもたらすことになるという⁽¹³⁾。

Theis や Simonsen によると、親によってたえずなんらかの形で子どもとの接触行動を通して、感情交流がなされていれば、社会的に不良な家庭であっても、いわゆる良い施設にまさといい、子どもを不良な家庭環境から良い環境の施設へと救済しても、その努力は大抵むだに終るといっている⁽¹⁵⁾。

Stockholm's Home for Delinquent Children の G. Jonsson は、非行を犯した少年の処置として両親と少年を一単位と考え、家族と一緒に公共病院に住ませることによって、更生させようという努力をしている。この際スタッフのメンバーは、ときどき家族的な臨床医師としてふるまうようにしているという⁽¹⁶⁾。これは親がその少年との接触を密にすることによって、失われた親子関係、殊に母性愛の喪失をとりもどそうとしているのであろう。

W. Healy らも、家庭環境殊に親の養育態度の重要性を認めている。而して出生直後の愛情飢餓状態は、その子の将来に及ぼす影響が大であるという⁽¹⁷⁾。

藤 岡 隆 男

Leo Kanner も、親の養育態度がその子の人格の発達を左右するといひ、Ferenczi は歓迎されない赤ん坊は、望まれて生れた赤ん坊にみられるような生活と成長に対する意欲が少ないという。Bender は早期の愛情欠乏によって生じた性格や行動の変化と、器質的な脳損傷によって生じたそれらの変化とが、非常によく似ているといっている。⁽¹⁸⁾

G. Kliman によると、所謂小児の微細脳障害 minimal brain dysfunction Syndrome が、その子の乳児期における母親のうつ状態から生ずるのではないかと、推論している。⁽¹⁹⁾

M. Mead によれば、ニューギニアで、一つは徹底的に子どもをかわいがり、常に乳房をふくませている部族で、その中で育った男たちは協調的で、支配欲がなく、戦争をきらい、ワナに獲物がかかるまで待つという。また別の部族の母たちは、子どもを好まず、授乳も立ったままでするし、子どもが満足しないうちに止めてしまう。このようにして育てられた男たちは好戦的になるという。⁽²⁰⁾

また授乳についてであるが、経⁽²⁾にもあるとおり、母乳栄養は当然のことと考えられていたのであるが、合理的な考え方の滲透と、人工乳の過大宣伝等に刺激されて、一時減少した母乳栄養も、その価値が再認識されて、増加しつつはあるのだが、往時に比べ未だしの憾がある。母乳は栄養的にも、消化の上でも乳児に最適の状態にあり、また免疫体や各種の酵素等を含んでいると考えられており、また母親の健康維持にも利点がある。かつ Skinship を通して、母子の精神の安定にもすぐれた効果があると考えられている。

Mary Imogene Bassett Hospital の A. S. Cunningham⁽²¹⁾ は、母乳で育った児は、特に出生後数カ月にはわたくしに罹患率がかなり低く、母乳の防禦作用は母乳栄養の期間と程度に比例して強まり、軽い疾患より重い疾患に対して、より強く作用する。そしてこの傾向は生後12カ月でも依然として存在していて、これはその他諸々の環境因子とは関係がないようだといっている。

これらのことは、乳幼児期における母親の養育態度が、その子に及ぼす影響の大なることを物語っている。

《 智 者 の 徳 》

経⁽²⁾には、能く方便を以って智慧を生ずるが故に智者と名づく、という。智慧とは文殊の智慧で代表されるように、不二の智慧であろう。人は善悪、正邪、美醜、貧富、男女を分別してこだわるものだから不安定になり、争い合うのではないであろうか。E. Fromm⁽²²⁾も「人間を光榮に導びいた理性はまた同時に彼の呪詛である。何故なら理性（分別する心）は、一貫して人間を解決不可能の二分性の問題を、強いて解決しようとするので、どうしてもさけがたい不均衡の状態におとしいれる」といっている。これらは本来根本的にそのような差別があるものではないのであって、役割、おかれている立場の差ではないであろうか。

たとえばかつて女囚であった人が、道路工事中片側通行のため交通整理をしていたとしよう。そこへ刑務所長の車が通りかかり、彼女の一時停止の制止にあったとき、その所長はすなおにその女の指示に従い、あたたかい願をかけこそすれ、卑窟な差別感情をそこでいただくであろうか。そこには男女、貴賤、貧富等の差別はなく、あるのは立場だけであろう。

大乗本生心地観經にいう母の徳の保育上の意義

徳崎好夫⁽²³⁾も言っているように、ややもすれば女性が家庭に止まり、育児や家事に専念することが、つまらぬ仕事であり、あたかも男女差別であるかのような考えがあることが問題なのである。むしろ育児や家事は重要な仕事なのである。

近時生活の科学化が進むにつれて、経済生活上、社会生活上の調整に失敗した母親、特に若い母親が精神的動揺を來たして病的となり、子殺しや母子心中が増えている。また価値感の多様化から母親蒸発による父子家庭がふえてきている。その結果、子の養育を親より引き離し、専門的集团的保育施設で育てる傾向があるが、かつては施設での集団生活は子どもに発達遅滞や、さまざまな精神的不健康をもたらすばかりでなく、身体的にもいろいろと影響を及ぼすことが知られており、これは hospitalism と呼ばれている。

施設で育てられた子どもは、他人に対する根本的な信頼感が養われていない。また社会的関係は皮相的であって、青年期まで持続する社会的、情緒的不適応は、彼らの初期の環境の激しい涸渇と情緒的無反応の結果であるという。⁽²⁴⁾

併しこの欠点が指摘され、適切で十分な物的環境と母性的養護があれば、避けられるものと考えられ、今はこのような old type の hospitalism はなくなってきた。これに対して精神面の遅滞や異常は new type hospitalism といわれているが、保育内容の向上につれて減少している。

しかし乳児院、養護施設の経験をした少年の退所後の社会生活が、必ずしも容易に適應しているとは言えないのではないだろうか。東京都シビルミニマム研究資料によると、乳児院、養護施設で成長し、中学を卒業すると同時に印刷工場に勤めるようになった或る少年は、初めての給料で、かねてより欲しかったトランジスタラジオを買ってしまった。少年はその日、独身寮の賄い婦に得意気にそれを見せたところ、あと1カ月の間、次の給料日までどうするつもりなのかと、きびしく叱責されたという。そういえば残金はいくらもなかったそうである。「今になって考えてみると、金というものがよくわからなかった」と、彼は当時を思い出しながら語ったという。家庭では子どもころから母親が家計のやりくりで苦勞していたり、急な出費の際には、両親の口論のひとつやふたつには出合うのではないか。しかし施設ではこの種の出来事に、身近かに接することはまずない。

ところでこの問題は、何回かの失敗を通して、やがて身につけることができる。しかし「どうして働かなければならないのか」という疑問がわき上がってきて、どうにもならなかったそうである。どうして働かなければならないのかという疑問は、どうして生きなければならぬのかという命題にもかかわる問題で、欠勤が2度、3度と重なり、結局その工場をやめてしまったという。

この少年に対して知能検査や性格検査を実施すれば、ことによると、数概念や時間と空間の概念形成が劣っており、かんしゃくを起しやすく、攻撃的で、注意力に欠け、人間関係に浅薄であるといった施設児に特徴的だといわれる結果がでるかも知れない。

併しこの青年はその後多くの苦勞を経て、最後にアフターケア施設の施設長に偶然の機会に出会い、立ち直り、そして彼は「生まれて始めて親というもの、愛情というものがわかったように思う」といっている。⁽¹³⁾

すなわち施設は改善され、hospitalism は可成り解消されたようではあるが、まだ多くの取り残さ

藤岡隆男

れた問題があるのである。

また American Academy of Pediatrics の会合で、ジョージタウン大学小児精神科の L. Cytryn は、米国で青少年期の自殺が過去15年間に3倍に増加しているといい、このような増加は貧困とか人口過密とか、失業といった環境が原因ではないといっている。またスカンジナビアでは、経済状態が最低の階層では自殺はほとんどないという。Cytrynによると自殺しようとする若者にはいくつかの共通した因子があり、その一つに、12才以下ではほとんどが離婚家庭の子であり、彼らは本当に孤独なのだと述べている。⁽²⁵⁾

されば貧しくとも両親のいる家庭で育てられることが、子どもにとっては最も大切なことであり、これによって生きる智慧も与えられるのではないであろうか。

一見平和で何事もないようにみえる人間関係も、一步間違えば恐ろしい地獄である。親殊に母親は、実際に自分の具体的な人生経験、身の毛のいよだつほどの恐怖或は危険を経、いかに生きべきかを傷だらけになって獲得した智慧を、日常の会話を通して、その子によく教えてくれるものではないであろうか。

また母性原理の絶対受容の精神は、如何なるものも許し受け容れてくれることに違いはないが、幼ない時から何が善であり、何が悪であるかを父性によって教えこまれた者が、たまたま過ちを犯して、その罰を恐れている時、その者を咎めるどころか、J. Macmurray⁽²⁶⁾ も言っているように、自分こそ許されねばならぬ人間であったという傷ついた心を持つ母の心にふれて、却って懺悔は深まるものであろう。

併し、初めから善悪を教えられないで、自己中心的に育てられた子どもに、Rogers⁽²⁷⁾ のような Non Directive Counseling 非指示的カウンセリングでは、E. A. ルーミスもいっているように、「われわれの沈黙や寛容は、相手にその行為を承認したものとして理解されるだけでなく、それどころか、時にはその誤まれる行為を催促しているものとして、受けとられることがしばしばある」⁽²⁸⁾ であろう。

このような絶対受容の心を持ちながら、父性原理を尊重すべきことを教え育ててくれるものがまた母の智慧でもある。それはまた浄土教でいう阿弥陀仏の第十八願の抑止文の上に、現われていると思われるのである。親鸞聖人の尊号眞像銘文（広本）に、⁽²⁹⁾ この文を註して「唯除といふはただのぞくということば也。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせむと也。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方の衆生みなもれず往生すべしとしらせむとなり」とあり、如何なる子をも受け容れる母にも、罪は罪として知らせるその智慧がなければならないのである。知らせることと、許し受け容れることとは矛盾しないのである。

絶対の受容は勿論重要なことではあるが、ただそれだけでは救済は現実的ではない。むしろ許されざる罪の自覚があってはじめてその受容・救済が絶対的のものとなり、すなおに懺悔は深まるものではないであろうか。

鈴木大拙⁽³⁰⁾ も、自然法爾は我儘勝手ということではなく、はからいのない世界が最終の目的であるが、それを達するまでは、どうしても一ぺん知の世界を通らぬばならぬ。知の世界、はからいの世界を苦しみぬいて、そこにはからいのない世界、自然法称の世界がひらけるのである。仙厓の歌

にもあるように「よしあしのなかを流るる清水かな」、葦のことをとところによりよしともあしとも言っているが、善悪の世界をそのままに、そのあいだを清水が流れるという自然の世界が展開されるのであるといっているが、一面から言えば、善悪をそのままに受け容れる世界があるのである。

《莊 嚴 の 徳》

経⁽²⁾には、妙なる瓔珞を以て而も嚴飾するが故に、莊嚴と名づくとある。

莊嚴について大智度論卷10⁽³¹⁾には、仏は能く三千大千世界の華香、樹木、一切の土地をして、皆悉く莊嚴ならしめたまい、一切衆生は皆な悉く和同し、心転じて善をなすとある。

家庭は、子どもが始めて社会関係を結ぶもっとも大切な環境である。子どもが最も依存性と可塑性に富んでいる時期に、この家庭の中で養育され、保護され、しつけられ、遊び、社会への適応を学び、人格の基本が形成される。したがって家庭に障害、例えば欠損家庭、犯罪家庭、不道德家庭、葛藤家庭、養育上の過誤、貧困などがあると、人格の健全な発達が妨げられ、犯罪や非行に走る重要な原因になりかねないのである。⁽³²⁾

環境、殊に家庭環境を解決し満足する、すなわち莊嚴することによって、子どもは心自らあらたまり、善い行いができるようになるであろう。而してこれを能くなし得るものは、母親ではないであろうか。

また大智度論卷4⁽³¹⁾には、身莊嚴ならざれば菩提心はその身中に住せずとある。

身体が健全なら必ず心が健全だとは限らぬまでも、身体が健全でなければ、健全な心はその子にそなわり難いであろうから、身体も健全に育てるべきであろう。

また大智度論卷45⁽³³⁾には、莊嚴について、「人の遠くに行くに重く資糧有るが如く、また賊を破するに諸の器械を備うるが如し。煩惱賊を破せんと欲するが故に。諸の福德智慧を集め、以って資糧となす」とある。

親の願として、その子に遠大なる目的を達成させるためには、社会のいろいろな誘惑に負けないような智慧と、人を感化せしめるような仁徳、それに途中で挫折することがないような精神力を身につけるように、育てあげることでありましょう。

大智度論卷46⁽³³⁾には、誓願を名づけて大莊嚴となすとあり、親の願がその子にそそがれ、その子について離れず、能く莊嚴となっていることであろう。

また大乘莊嚴経論⁽³⁴⁾には、義をよく知っている者が、無垢なる言葉、無垢なる文章を以って義を明らかにする、開示することが莊嚴だという。親の願が本当に解った子どもは、親の願をその行いの上に示して、能く人を導き、人に尊敬される人となることであろう。

《安 隱 の 徳》

H. F. Harlowの研究によれば、サルの子どもを使った実験で、代用としての針金で作った母親と、テリー織の母親と、いずれにより多く接近するかを、両方から餌を与えられるようにして試みたと

藤岡隆男

ころ、テリー織の母親の方により多くしがみつことが明らかにされ、これによってサルの子は、餌の他に接触による愛情を求めていることがわかった。また恐ろしい目にあわせると、針金の母親から乳を飲んで育った子ザルも、テリー織の母親ザルの方に走っていった。これはその方が、いっそう安心感を与えてくれるためであろう。つまり触覚的刺激は生まれつき動物の赤ん坊に満足を与え、そこに安らぎを得るためであろうという。^{(35), (36)}

W. Glasser⁽³⁷⁾によれば、母親はわが子を愛し、その子は母親をよりどころとして慕う、この愛し愛される欲求と、自分は自分自身にとっても、子どもにとっても価値ある存在だと感ずる欲求が、母親にとっても必要であるという。

人間の母親は、妊娠、分娩そして授乳をはじめ、養育行動の日常的繰返しの中で、子どもにとってもっとも価値ある存在であるという自覚ができあがり、乳児もまた、授乳、排泄物の除去、愛撫などの生理的欲求の充足をとおして、母親への積極的思慕を示すようになる。子どもの健全な心身の発達はこのような安定した母子関係の中で遂げられる。

このようにして母子関係が安定してくると、生後半年をすぎると頃から探索活動をはじめようになるが、子どもはいつも母親を安全基地として確保できて、はじめて活発に行われるようになるものである。すなわち母のもとでは、いつでも受け容れてもらえるという安らぎがあるからである。

日本最初の精神分析医となった古沢平作は、1932年7月ウィーンのフロイド宅を訪れ、『阿闍世コンプレックス』なる論文を提出した。⁽³⁸⁾ それまでの精神分析学の上では、罪責感の根本に oedipus complex が存在し、この罪責感を免れるために、或いはこれを鎮静させるために刑罰を望むのであり、この罪責感が犯罪、非行に先行すると考えられていた。⁽³²⁾

Oedipus の欲望の中心をなすものは、母に対する性愛のために父を殺すところにある。然るに阿闍世の母に対する殺意は、母に対する愛慾にその原因があるのではなくて、当然母にはゆるさされている筈の自己の生命が、その母によって裏切られたという怒りから発しているのである。

わが国の子どもにとって、親が男・女である現実直面すること、とりわけそれまで得られていた母と子の一体のきずなをゆるめて、母が女になってしまうことは、許し難い裏切りである。そしてこの時、母への甘えは怨みに変わるが、母に対するこの甘えと怨みの ambivalence (反対感情併存) は、実は日本人なら誰でも、必ずその深層心理に抱く根源的な葛藤である。

しかもわが国の場合、父・母の側もまた、自分たちに向けられるこの子どもの怨みに対して、罪悪感をおこしこそすれ、自分たちの男、女としての正当な権利を、子どもたちに向って主張することができない。

とくにわが国では、江戸時代以来の間引の怨念が現代の中絶王国にひきつがれ、ひそかな罪悪感をもつ母親が多い。怨みに駆られた子どもたちは、親の側のこれらのひそかな自責感やうしろめたさを読みとることで、そのような親らしくない親を、徹底的に責め苛むことになる。この未生怨こそ阿闍世コンプレックスの主題である。阿闍世の物語を導くものは、母と子の相互関係的な通い合いである。韋提希夫人が自己中心的な母から、まことの母へと心理的成長をとげるその推移との相互関係の中で、阿闍世もまた「母への怨み — 罪悪感 — 母にゆるされる体験 — 懺悔心」という心理的な成長をとげてゆく。母と子は互いに相互関係的、相互対応的であって、「性愛」とか「憎し

み」とか「罪」とかの、実体化された何かによって決定されない。そしてこのような相互性は、以心伝心にお互いの気持をわかり合う日本的なコミュニケーションと表裏をなし、お互いに気心の通じる者同志として、自然に相手の気持を察して事を運んでいく、一つの日本的な才能にもなっている。

古沢によれば、子の「攻撃＝仕返し」を超えたこの母或は母性愛による「ゆるされ体験」こそが真の人倫の起源であると考え、そしてこのゆるされ型の罪意識を懺悔心と呼んでいる。⁽³⁹⁾ 即ち、ゆるされ体験に安らぎ、「安穩」をおぼえ、自分の罪業を自覚することが深まるのである。

母性の原理は、包含する機能によって示される。それはすべてのものを、良きにつけ悪きにつけ包みこんでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。⁽³⁸⁾

親鸞に対する救世菩薩の夢告に「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂」⁽⁴⁰⁾とあり、前二句は女犯という破戒行為の善悪など問題にせず、徹底的な受容による救済を誓っているのである。これは勿論母性的な愛情を代表するものである。

この母性愛がその子の身に到り届いた時、その真実の愛を讃嘆する心が生じ、このとき自ら懺悔の心が深まり、この徹底した懺悔の場ですべてのはからい、迷妄の心が消滅して、そこに本来あるべき自己が、本来あるべき方向に向って現われでてくるのである。それは真実の親の願にかなった人間にならねばならぬという自覚を持ち、そして彼自身の本来の目的と、その目的にかなった精進をする姿となって現われることであろう。そして Frankl⁽²⁸⁾もこの目的と役目を持つことによって人は充足感・安らぎを得ることであろうと言っている。

しかし E. Neumann によれば、子どもが勝手に母の膝下を離れようとする時、母は子どもを呑みこんでしまう一面を持っていて、かくて母性原理はその肯定的な面において、生み育てるものであるが、否定的な面においては呑みこみ、しがみつきて死に到らしめる面をもっている。

何ものをも呑みこむ恐ろしい great-mother 太母像としては、牛も荷車までも呑みこんでしまうような山姥のようなものであり、また鬼子母などは太母の二面性を如実に示しているといえよう。⁽³⁸⁾

Jung⁽⁴¹⁾によれば、母性の本質は慈しみ育てること、狂宴的な情動性と暗黒の深さがあるという。即ち何ものをも区別しない平等性と、すべてのものを呑みこむ恐ろしさを示しているという。

宝積經卷44⁽⁴²⁾にも、母も時に女となり、よく女の幻誑の術を身につけて、男子の大志を摧くことがあるという。

であるから未熟な母の愛は、一步誤ると子どもを犠牲にしてしまうものである。

而してここでいう母親像は、その肯定的な面であることは勿論で、そこにこそ真の安穩があるのである。而してこの母親像の否定的な面を抑制するため、次の教授、教誡、与業の徳が説かれてあるのであろう。

《 教 授 の 徳 》

經⁽²⁾には、善巧方便して子を導引するが故に名づけて教授というところがある。

前に述べたとおり、親はその生活態度を通して、子に如何に生きべきかを、いろいろと教えてくれるものであろう。

藤岡 隆 男

入楞伽經卷4⁽⁴³⁾にも、直爾に相を示すを名けて説法となすとあり、智度論卷99⁽⁴⁴⁾には、説法に二種あって、一には口説法、二には身現法であるという。身現法とは、身すなわち行動で示し導くことであり、入楞伽經の説法に通ずるもので、言葉を用いずに能く導びくことができるのは、ふだんから信頼関係ができていからであろう。この身現法がすなわちここでいうところの教授の徳ではないであろうか。

今、家庭内でも、そして学校内でも、暴力問題が重大関心事になっている。その原因はいろいろあるであろうが、かつては家庭内に於ても、学内に於ても、権威というものがあつたし、それに対する尊敬或は畏敬もあつた。併し今はそれが無い。むしろ権威と権力とを混同して、それに反抗する傾向が強いに、その原因の一つがないであろうか。

権威としての存在である父親は、妻や子がつくりあげる父親イメージに、うまくのっかかることであり、妻子が父親に求めるその願望にかなったイメージになる術を身につけること、その実力というか、権威を身につけることである。そして母すなわち妻は、子どもにこの父親イメージをつくる役目を持つことである。⁽⁴⁵⁾

經⁽²⁾にも、父に慈恩ありといっているが、涅槃經⁽⁴⁶⁾にも、この慈のはたらきについて、ただいだけで相手を畏敬せしめる作用であると説かれているが、これはこのイメージに通ずるものではないであろうか。またこれが私のいう権威でもある。而してこの権威も単なる幻影であってはならないことは、勿論である。

同經⁽⁴⁶⁾に、我々を守ってくれるものの一つに禁戒があると説いてあるが、これは権力による抑止では全くなくて、願から発するものであり、ここでいう権威とはこの願がその人柄の上に現われ出たものでなければならない。

パウル・フェダーンによって語られた「父親なき社会」という言葉は、いつの間にか現代社会の心的な特性を言い表わす基本概念の、一つになってしまった。⁽⁴⁷⁾

善悪の区別があいまいになり、自信を失い、迷いながらしか子供たちを指導できない父母や教師、罪と罰の因果関係が拡散し、見失われ、価値観が多様化しすぎたために、特定の規制原理を相対的なものとしてしか、人々が受けとられなくなってしまった時代、何事にも責任を回避し、当事者とならない処世術が人々の身につけてしまった社会生活、個人の感情や利害を人権の名の下に優先させ、社会秩序や国家を軽んずる風潮、このようなわが国社会の現代的な苦悩は、第一に「母なるもの」の古来からのよき伝統を否定し、父性原理である西洋の規制原理への同一化に努力し、その結果親子関係における「日本的なもの」を見失ってしまったことである。第二に、このように高価な犠牲を払って達成しようとした西洋化への努力が、結局は欧米先進国に共通の、現代社会に特有な父親なき社会化を、ひきおこしてしまったことであるという。⁽³⁸⁾

またもう一つの原因は、学内に於ても、家庭内に於ても、学業成績のよいものだけが受け容れられ、それについていけないものは「落ちこぼれ」として、受け容れられない傾向があることによるのではないであろうか。

人にはそれぞれ智的才能に優れているものもあり、肉体労働に向いているものもある。人間の価値は学業だけで決まるものではないことは、社会に出てみればわかることであろう。

大乘本生心地観経にいう母の徳の保育上の意義

フランスの Robert Debfe⁽⁴⁸⁾ は、過激な学生運動に対して、身体の使用を軽視することは、あらゆる角度からみて極めて遺憾なことで、多くの彼らについて、homo sapiens (知的人間)がhomo faber (工作的人間)を抑圧することは、浅慮以外の何ものでもないと警告し、知的労働の行き過ぎの結果、かき乱された彼らの不均衡は、彼らの生活の中に、工作人として、或は労働者として、あるいは技能者としての訓練を織り込むことによって、挽回されるであろうと言っている。

如何に正しいことであっても、権威、願いに対する信頼が失われている現今、時にはやはり言葉も、すなわち言って聞かせることも必要である。これが次にあげる教誡の徳ではないであろうか。

《教 誡 の 徳》

経⁽²⁾には、善き言辞を以って衆悪を離るるが故にという。

仏説華手経⁽⁴⁹⁾に「もし善からぬ考えを持っていたら、それをすべて能く知りつくして、言葉を選んで、正しい道に教え導く。時にはすすんで教え導くが、時にはじっとその時機を待つ。人には考え方に差があることをよく知って、それに応じて教え導くので、よく正しい道に導き入れることができる。また時には呵責するが、ただがむしゃらに呵責するのではなく、時に応じて相手の意見をよく聞く。如何に善好の言であっても、時宜を得なければ聞いてもらえるものではない」とある。

成実論⁽⁵⁰⁾にはまた、人が業報のために障えられているときは、その業報を尽くさしめ、しかるのち正しい道を説く、とある。

かくしてはじめて諸の悪、過ちから離れしめることができることであろう。

弥陀の本願に、得弁才智の願というのがあるが、⁽⁵¹⁾ここで言う善き言辞とは即ち弁才智、正しい智慧を以って以上のことをよくわきまえ、あらゆる子どもに碍りなく説いて導く言葉のことであろう。また正しい智慧とは、人は願い願われている存在であるということ、願う以上に願われている存在であることを知らしめる智慧であろう。どれほど価値感が多様化していようと、この願こそは永遠の真実であろう。この願によって人は生き、人はうまれ変わるものではないであろうか。

この願は、この世で最高のものであり、この願に動かされないものはないと信ずるが故に、私はこれをここで権威という語で説明しているのである。

《与 業 の 徳》

経⁽²⁾には、能く家の業を以て子に付属するが故にとある。

精神衛生鑑定医の松川善彌⁽⁵²⁾も、家庭内で勉強以外の人生問題についての話し合いの機会がないと、家庭であるという連帯感とか、その一員であるといった存在意識がないといい、またこれを高めるためには、子どもにも家庭における仕事、すなわち家業^{かぎょう}の分担とか、役割を持たせ、それを果たさせることがよいといい、これによって家族の一員であるという実感と、自信がでてくるといっている。また「この家族間の何気ない日常の話し合い、すなわち家業^{かぎょう}が善巧方便となって、集団内のルールとか、長幼序列の精神が自然に身につく、自分のあるべき様が自覚できるようになるもの

藤 岡 隆 男

ではないであろうか。そしてこれらのことが子どもの、そして親の情緒不安を解消してくれるのではないであろうか」という意味のことを言っているが、傾聴すべきことだと思う。

これは一つには前にも述べたとおり、知的労働の行き過ぎの結果かき乱された子どもの不均衡を回復することにもなるであろう。

また小児の発達に関する文献をみると、子どもは親の模倣または親の型に合わせるといふ強力な過程によって、社会性を持つようになるといわれている。子どもは自分自身の養育されてきた方法に、また自分が観察したことに対して反応するものである。興味のあることは、子どもたちがまだ小さいときに手に入れたこれらの『事実』が、生涯を通じて疑問の余地のない行動の指令となることである。もし大人たちがこれらの学習行動を良心的に、また努力して再検討してやらなければ、子どもたちが親になったとき、まったく気づかずに、これらの行動を繰返す結果となる⁽¹¹⁾という。Prestonも、「首尾一貫性はまず家庭から始まる。家庭でわれわれは1日1日と生活の型を修得する。それも主に親、殊に母親の態度と行為を見習ってである」⁽¹⁸⁾という。

されば以上に述べてきた親、殊に母親のよき生活態度が、子どもに無意識的に、よく受けつがれて行くことであろう。

《む す び》

以上に述べてきたことは、われわれが求めてきた母親の理想像であり、母性なればこそ成就できる特質でもある。

大地、能生、能正、養育、智者、莊嚴は、絶対の受容を意味し、さればこそ子どもに安穩、安らぎを与えることであろう。併しただそれだけでは未だ充分とは言えない。過ちを過ちと知る智慧があって、その受容が現実化するものであろう。而してその絶対受容の否定的な面を抑制するために教授・教誡・与業の徳が説かれてあるのではないであろうか。

われわれは、それを母性にのみおしつけるつもりは毛頭ない。併し父性にはできないその母性をむしろ讚美し、それに協力して、よりよき保育の成就を希求して止まないものである。

参 考 分 献

- (1) 福田泉正：宗教と精神分析，推古書院，1949.
- (2) 大乘本生心地観経卷2：国訳一切経，経6，大東出版社，昭10.
- (3) 馬場一雄編：出生前小児の医学，医学書院，1968.
- (4) M. Boss: Körperliches Kranksein als Folge Seelischer Gleichgewichtsstörungen, Hans Huber, Bern. 1956.
- (5) 大百科事典，平凡社，昭7.
- (6) 大方等大集経：国訳，大2.
- (7) 金光明経：国訳，経5.
- (8) 過去現在因果経：国訳，本4.

大乘本生心地観経にいう母の徳の保育上の意義

- (9) V. E. Frankl: Pathologie des Zeitgeistes, Franz Deuticke, Wien. 1955.
- (10) 観経疏: 真宗聖教全書 1, 興教書院, 昭24.
- (11) M. H. Klaus, J. H. Kennell (竹内, 柏木訳): 母と子のきずな, 医学書院, 1979.
- (12) マスロー A. H. (上田訳): 完全なる人間, 誠信書房, 1964.
- (13) 二木武, 高野陽, 高橋種昭ら: 精神衛生, 医歯薬出版KK, 昭53.
- (14) R. Spitz (古賀訳): NO AND YES, 同文書院, 昭46.
- (15) J. Bowlby: Maternal care and mental health. (黒田実郎訳) 岩崎学術出版社, 1973.
- (16) Japan International Medical Tribune, vol. 2, No 6, 1969.
- (17) 平井信義; 田口恒夫他: 児童保健と精神衛生, 光生館, 昭44.
- (18) Kanner. L. (黒丸・牧田訳): 児童精神医学, 医学書院, 1964.
- (19) Peter Michelmor: 小児の情緒障害の早期予防, Modern Medicine of Japan, 朝日新聞社, 1975.
- (20) 小林提樹編: 乳幼児精神衛生, 日本小児医事出版社, 昭49.
- (21) A. S. Cunningham: Morbidity in breastfed and artificially fed infants, II, J. Pediatr. 95; 685, Nov. 1979.
- (22) E. Fromm: Psychoanalysis and Religion, Yare University Press, U.S. A. 1950.
- (23) 徳崎好夫: 建帛社だより, 昭56, 1.
- (24) Provence, S. and Lipton, R. C.: Infants in Institution, International University Press Inc. 1962.
- (25) Japan International Med. Tribune, vol. 14, No 25, メディカルトリビューン日本支社, 1981, 6.
- (26) J. Macmurray: The Structure of Religions Experience, Yale University Press, New Haven Connecticut, 1946.
- (27) C. R. Rogers (友田不二男訳): Counseling and Psychotherapy. 岩崎書店, 1964.
- (28) フランクル (宮本, 小田訳): 精神医学的人間像, みすず書房, 昭41.
- (29) 尊号真像銘文 (広本): 真宗聖教全書 2.
- (30) 鈴木大拙: 知と行, 親鸞教学 9, 大谷大学真宗学会, 昭41.
- (31) 大智度論卷 4, 10: 国訳, 釈 1.
- (32) 樋口; 橋本: 犯罪非行の臨床, 医学書院, 1964.
- (33) 大智度論卷 45, 46: 国訳, 釈 3.
- (34) 宇井伯寿: 大乘荘嚴経論研究, 岩波書店, 昭36.
- (35) ポール. H. マツセン (今田訳): 児童心理学, 岩波書房, 1966.
- (36) 坂田; 岡本: 青年の心理と適応, 福村出版, 1963.
- (37) グラッサー (真行寺功訳): 現実療法, サイマル出版会, 1975.
- (38) 河合隼雄: 母性社会日本の病理, 中央公論社, 昭51.
- (39) 小此木啓吾: モラトリアム人間の時代, 中央公論社, 昭54.
- (40) 親鸞夢記: 親鸞聖人全集, 言行篇 2, 親鸞聖人全集刊行会, 昭32.
- (41) Jung: Psychological Aspects of the Mother Archetype, The Collected Works of C. G. Jung, vol. 9.,
- (42) 宝積経卷 44: 国訳, 宝 2.
- (43) 入楞伽経卷 4: 国訳, 経 7.
- (44) 智度論卷 99: 国訳, 釈 5 (2)
- (45) N. W. マッカーマン (小此木; 石沢訳): 家族関係の病理と治療, 岩崎学術出版社, 1958.
- (46) 涅槃経梵行品卷 16: 国訳, 涅 1.
- (47) A. ミッチャーリッヒ (小見山実訳): 父親なき社会, 新泉社, 1972.
- (48) Robert Debré: LA BIOLOGIE AIDE-T-ELLE A COMPRENDRE LA JEUNESSE RÉ-VOLTÉE.?. Extrait de la "Revue de Paris" Decembre 1969. Traduit de I, Français par

藤岡隆男

le Docteur T. Kimura.

(49) 仏説華手経：国訳，経13.

(50) 成実論卷1：国訳，論3.

(51) 大無量寿経講義：新編真宗大系，1，真宗典籍刊行会，昭24.

(52) 松川善彌：病める児童，生徒，Modern Medicine of Japan,朝日新聞社，1981. 6.